様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００２８９

研究課題名（和文）佐藤春夫資料に基づく文学者の国際交流とアジア表象の研究

研究課題名（英文）Studies on Writers' International Interactions and Representations of Asia on the Basis of Sato Haruo's Previously possessed Materials

研究代表者
河野　龍也（KONO, TATSUYA）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：２０５１１８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　佐藤春夫は、日本の近代作家中屈指の豊富な人脈に恵まれていた。書簡をはじめとする春夫の旧蔵資料を調査し、多数の新資料から、未知の文壇ネットワークの様相が具体的に分かってきた。とりわけ中国文化人との往来や、アジア紀行に関する一次資料の解析では、春夫が文学者の国際交流において果たした役割の大きさが改めて見えてきた。佐藤春夫研究を軸に、海外の研究者との対話がさらに期待できるようになった。
　また、春夫における詩人と小説家という２つの顔の使い分けに注目し、文芸ジャンルと文学者のナショナルアイデンティティが密接な関連性を持つことが分かった。これは近代文学研究に対する一つの新しい問題提起となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の特色は、作家の旧蔵資料を整理し、極めて具体的な伝記情報の把握を目指す一方で、海外を含めた近代文学者相互の幅広い交流の実態を解析していく点にある。それは資料研究を作家研究に閉じ込めるのではなく、より広い社会現象の一つとして捉える研究スタイルの新しい提案になったはずである。
　また、文学ジャンルが近代的なアイデンティティの問題と強い関連性を持つことに着目した本研究では、佐藤春夫を通じて歴史認識や異文化理解のあり方を現代社会に問いかけた。国内外での展覧会の実施や、文庫本出版による一般的関心の喚起によって、近代文学を読むことが現代社会を理解する有効な手段になることを印象づけることができた。

研究成果の概要（英文）：　Haruo Sato was blessed with one of the richest personal connections of any modern Japanese writers. Through research into Haruo's previously possessed materials, including letters from other authors, and a number of new materials, we have been able to gain a concrete understanding of aspects of his unknown literary network. In particular, the analysis of primary documents relating to his correspondence with Chinese literary figures and his Asian travel writings has revealed once again the significant role Haruo played in the international exchange of literary figures. With Haruo Sato studies at the centre, we can now look forward to further dialogue with scholars from abroad.
　In addition, attention to the use of the two faces of poet and novelist in Haruo has revealed the close relationship between literary genres and the national identity of literary figures. This raises one new question for modern literary studies.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本文学　近代文学　台湾　中国　植民地　紀行文　草稿研究　国際情報交換

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2010 年以降、佐藤春夫遺族が保管していた書簡や原稿・ノートなど数多くの一次資料の調査を進めてきた。そこから、この作家が文壇内に持っていた幅広い人脈交流の実態が分かってきた。春夫は創作活動によって文壇に影響力を持っただけでなく、後進の指導や企画の後押しなど、言わば文壇の総合プロデューサーとしての役割を果たしてきたことが改めて明らかになった。

この資料群は、海外文学との相互影響に関心を寄せる現代の日本近代文学研究にとっても、重要な情報の宝庫と言えよう。例えば、戦前の改造社と上海の内山書店とが太いパイプを持ち、このルートで輸出された日本の文学書が、中国の近代文学者に大きな影響を与えた事実が近年指摘されるようになった。春夫もまた内山書店を通じて、魯迅や周作人らと深い信頼関係を築いていた。そして世界初の魯迅全集（改造社版『大魯迅全集』1937）の刊行に奔走するなど、海外文学者との国際交流において果たした春夫の功績は、文筆を超えた文化事業として高く評価されはじめていた。

書簡を中心に、本研究で春夫旧蔵の資料群の解析を進めれば、文壇における作家ネットワークの様相を大きくとらえることが可能になるだけでなく、その重要な一角を占める海外との文化交流にも具体的に踏み込んで検証できるようになると予想された。さらにはその知見に基づいて、海外の研究者と協力体制を組むことにも期待が持てた。

1990 年代以降の研究界において、佐藤春夫はすでに「アジア文学」の視座から日本近代文学を捉え直すキーパーソンとなった観がある。芸術派の権威、あるいは戦争詩人といった従来の固定的な作家イメージからの転換は、台湾紀行文の柔軟な批評性を再評価するところから始まった。本研究でも、春夫のアジア紀行に関連する新資料の発掘を優先的に行い、これまで研究代表者（河野龍也）が積み重ねてきた現地調査やインタビューの成果と接続することを目指した。資料とフィールドワークの両面から春夫のアジア体験の内実を明らかにすることで、現在まで続く再評価の議論により具体性をもたらすことができると考えたのであった。

成果発表の機会は当初から用意されていた。研究代表者は、2016 年の段階で台湾文学館（台南）と交渉し、春夫の渡航 100 年にあたる 2020 年に佐藤春夫旅行文学展を同館で開催する約束を得ていた。また、春夫生誕 130 年にあたる 2022 年には、これまで調査してきた資料を総合的に見渡し、改めてこの作家の近代文学における役割を大観する国内展覧会を立案中であった。研究成果の社会還元については、これらの明確なビジョンが存在していたために、展覧会への成果活用を中間目標としつつ、研究を計画的に推進できる点も本研究の有利な点と考えられた。

２．研究の目的

本研究の 1 つ目の目的は、近代作家のアジア観と海外交流の実態に迫るため、佐藤春夫遺族から託された膨大な書簡とノートを精査し、特にアジアの文学者との交流状況を解明することにあった。

そもそも佐藤春夫の文学上の特質は、生涯〈小説家〉と〈詩人〉の二つの顔を使い続けた点にある。春夫は自らの詩を〈日本人〉としての逃れ難いアイデンティティに結び付け、時にこれを足かせとして意識し、小説を〈世界人〉としての自己確認のためのジャンルと規定していた。ナショナル・アイデンティティを文芸ジャンルに持ち込む発想自体は近代文学者によく見られるものである。だが、二つのジャンルをまたぐことで、アイデンティティの固定化を避けようとするあり方は、春夫独特のものであったと言える。

だが、ここで問われるのは、〈世界〉と〈日本〉の中間領域である〈アジア〉の地域性を彼がどう捉えていたかということであろう。本研究の 2 つ目の目的は、春夫のアジア紀行文の徹底的な実証研究を行うことであったが、それはこの問題をより多角的に捉えるためのものでもあった。子孫への取材や郷土資料により、台湾・福建で春夫が交流を持った人々の経歴を調べることは、春夫の紀行文が持つ批判性の由来を、旅先の人脈や情報源のレベルから解明する新たな視角を生み出す。

現実体験や人脈を突きつめていくことは、紀行文や創作のなかに虚構性を見出すことと同義である。ただ、表現に際して選択や加工が生じるのは当然であり、虚構性を指弾すること自体が目的なのでは決してない。それよりも、なぜそこで虚構化が必要だったのかを問うことに文学研究上の意義がある。このような問いが可能になる新たな研究のステージを用意するためには、情報のデータベース化を進め、研究基盤を整備することが急務であった。また、研究成果を国内外に積極的に発信することで、特に中国語圏の研究者と連携を進め、証言や文物など失われつつある文化交流の遺産を丁寧に発掘・保全することも本研究の重要な目的であった。

３．研究の方法

(1) 書簡・日記の整理と撮影・解読

佐藤春夫宛書簡については、年代順のリストの増補と写真撮影を継続し、家族や文学者など重要度の高いものから順次翻刻作業を行った。特に父・佐藤豊太郎から春夫やその弟たちに宛てた書簡は、今回新たに見つかったものも多く膨大な数にのぼる。上京後の春夫と郷里新宮とのつな

がりを考える上で、父の書簡にはきわめて重要な情報が含まれている。また、すでに現存を報告した春夫の少年時代の日記（1904 年）と、東京で春夫と同居した 2 人の弟の日記（1912～14 年）の状態を精査し、年代の錯綜を正した上で、カラー影印版による完全公開を行った。内容の公表については関係者の利害を損ねないよう、佐藤家遺族の了承を得て、新宮市立佐藤春夫記念館の協力のもと慎重に検討した。

(2) 草稿・ノート類の分析

草稿・日記・ノートの解読作業を通じ、作品の完成形では失われてしまった構想の原型を知ろうと努めた。父豊太郎宛書簡に同封されていた初期詩篇の草稿を分析・公表し、新たに大陸戦線の視察で使用したノートも研究対象に加えた。乃木希典の殉死への反応、戦地の日常に対する向き合い方などを、単に一作家の伝記事項の範囲にとどめるのではなく、近代日本の精神史のなかに資料を位置づけて考察することを心掛けた。

(3) 郷土史料の発掘

1920 年に佐藤春夫が旅行先で見た風景を具体的に再現するため、台湾・福建関連作品に登場する舞台についての古写真・古地図を積極的に収集した。また厦門では、春夫の滞在先の建物を調査した。現地研究者の協力を得ることで、春夫の作品に登場する人物の子孫の所在を確認することができた。しかしその後、インタビュー計画の大部分は、新型コロナウイルスの蔓延による渡航規制のため延期を余儀なくされ実現できなかった。ただし文献調査やオンラインでの聞き取りによって、旅行先の人脈研究にも一定の成果をあげることができた。

４．研究成果

(1)著書・編著の刊行

著書として、博士論文およびそれ以降の論考を全面改稿し、本研究の成果 2 章分を加えた単著『佐藤春夫と大正日本の感性：「物語」を超えて』（鼎書房）を刊行した（2018 年度）。いわゆる「大逆事件」後の傾向詩や、小説デビュー作「田園の憂鬱」に顕著な「日本人ならざる者」としての自己規定は、未知の異郷に郷愁（ノスタルジー）を感じるという逆説的な春夫の心性の表現であることを指摘。それが台湾・福建紀行文の高度な批評的達成へとつながる過程を明らかにした。本書は 2020 年 3 月に第 28 回「やまなし文学賞（研究・評論部門）」を授与された。

また、本研究で発掘し、台湾文学館の展示に供した新資料の図版と、日台研究者の論文を集成した中国語図書『文豪曾經來過：佐藤春夫與百年前的臺灣』（衛城出版）を台湾の研究者と共編し、日本と台湾をまたぐ春夫研究の基盤形成に貢献した（2020 年度）。

さらに、春夫生誕 130 年を記念する展覧会の図録『知られざる佐藤春夫の軌跡：秘蔵資料を読む』（武蔵野書院）を編集し、オールカラーで刊行した。本研究の成果を集約し、入門書と最新の資料集を兼ねる図書になった。本書により、豊かな人脈に恵まれ、多分野で活躍した春夫の生涯にわたる芸術活動の全体像を、実際の資料を読み解きながら辿ることができるようになった（2022 年度）。

(2)文庫本新刊と解説執筆

佐藤春夫の台湾旅行関連作品を 9 編集めた『佐藤春夫台湾小説集　女誡扇綺譚』を中公文庫から刊行した。文庫解説には、本研究の過程で特定された舞台に関する詳細な情報や、旅行日程に関する従来説の再検討など最新の研究成果を反映させ、一般的な作家紹介・作品紹介にとどまらない内容を盛り込むことができた。この出版は日本文学の読者だけでなくアジア史や台湾に関心のある幅広い層から支持された（2020 年度）。

上記の好評を受け、翌年には姉妹編『佐藤春夫中国見聞録　星／南方紀行』を中公文庫から刊行することができた。中国大陸での旅行と文人交流に関する文章 9 編を収録した。1920 年の福建旅行と、1927 年の上海・杭州・南京旅行から生まれた紀行文学の成果を 1 冊の文庫本で読めるようになった利便性は大きい。文庫解説には、本研究で集めた現地資料や、田漢・郁達夫の日記を参照するなど、研究上の新しい知見を盛り込むことができた（2021 年度）。

また、春夫の生誕 130 年を記念し、デビュー作『田園の憂鬱』の岩波文庫版が改版されることになった。本文校訂と注釈・文庫解説執筆を担当した。文庫解説では、大正青年である主人公の西洋趣味を、近代人のアイデンティティ探求の問題として捉えなおす新しい作品論を展開した（2022 年度）。

(3)展覧会の実施

本研究課題の成果を活用し、台南の台湾文学館における展示企画「百年の旅びと：佐藤春夫 1920 台湾旅行文学展」（百年之遇：佐藤春夫 1920 臺灣旅行文學展）を開催した。研究代表者が日本側企画責任者となり協力した。展示に関する具体的な業務では、全体構成と展示品説明、翻訳等を担当した。展示期間は 2020 年 4 月 3 日から 11 月 29 日までの予定であったが、好評のため 2021 年 2 月 28 日まで延長した。本展示に関して、2019 年 8 月に台湾文学館から蘇碩斌館長、邱若山教授（靜宜大學）、張文薫副教授（臺灣大學）の一行を新宮に迎え、佐藤春夫記念館において、展示概要の打ち合わせと展示品の選定を行った。また、新宮市長を表敬訪問し、台湾における記念展開催の記者会見を行うなど綿密に準備を進めた。ところが、新型コロナウイルス

の流行による渡航規制のため、国際交流行事はすべて中止となり、研究代表者すら会期中一度も展示を見に行くことができなかった。しかし、この展示によって佐藤春夫の一般的な知名度は、台湾で飛躍的に向上した。展示に合わせて図録を兼ねた論文集『文豪曾經來過：佐藤春夫與百年前的臺灣』（衛城出版）が台湾で出版され、その編集と執筆を担当した。展示と出版を通じて、今後の研究連携や情報集約の基礎固めができた意義は大きい。また、資料写真と説明文を使って、台湾文学館がデジタルミュージアムを構築し、会期終了後もホームページで公開を継続している。これには日本語版・中国語版があり、日本からもアクセスできる。（2020 年度）。

次に、佐藤春夫生誕 130 年を記念し、調査協力機関である実践女子大学を会場として、「知られざる佐藤春夫の軌跡―不滅の光芒―」展（実践女子大学文芸資料研究所・公益財団法人佐藤春夫記念会共催、実践女子大学香雪記念資料館協力）を開催した。会期は 2022 年 9 月 26 日から 10 月 15 日まで。展示品 114 点のうち約半数は新資料もしくは初公開の資料であり、本研究の集大成と位置付けて準備にあたった。展示品をオールカラーの図版として掲載し、資料の分析から判明した新たな春夫文学の全体像を提示する書籍『知られざる佐藤春夫の軌跡―秘蔵資料を読む』（武蔵野書院）を刊行できたことは、成果発信として意義深い。この本によって本研究の成果の全体像を把握することができるだろう。会期中の 10 月 8 日に開催された公開講座では、展示品について解説したほか、佐藤春夫遺族の髙橋百百子氏、竹田長男氏、竹田有多子氏への公開インタビューも行い、家族から見た春夫の戦後の風貌について貴重な証言を得た（2022 年度）。

上記以外にも、「太宰治と船橋」展（船橋市西図書館、2019 年 6 月 14 日～7 月 10 日）、「文豪・佐藤春夫と太宰」展（同、2021 年 6 月 12 日～9 月 26 日＊新型コロナウイルス蔓延により、8 月 29 日までに短縮）では展示協力と講演を、「辻音楽師の美学」展（三鷹市美術ギャラリー、2019 年 9 月 21 日～10 月 20 日）ではパネル執筆を行い、本研究の成果を活用することができた。

(4)文壇交流を示す新出書簡の分析と公開

芥川龍之介が最晩年に佐藤春夫に宛てた書簡が見つかり、内容を公開した。書簡は 1926 年 11 月 9 日付で、随筆集『梅・馬・鶯』の装幀を芥川から春夫に依頼したもの。春夫に酷評された 1919 年の芥川の作品「妖婆」を「アグニの神」に改稿したことにも触れている。両者のライバル関係が垣間見える内容で、春夫の芥川追悼文にも言及されている書簡だが、追悼文執筆当時から所在不明となっていたものが、佐藤家資料のなかから見つかった。2022 年 7 月 29 日の NHK ニュース及びその後の新聞報道で取り上げられた（2022 年度）。

また、太宰治がパビナール中毒治療のため武蔵野病院に入院する直前に春夫に宛てた書簡が見つかり、内容を公開した。書簡は 1936 年 10 月 7 日付で原稿用紙 1 枚の裏にびっしりと書かれ、清書をする余裕もなく投函されたものと考えられる。芥川賞落選に失望した太宰は、作品「創生記」のなかで春夫が授賞を確約していたように書き、春夫の怒りに触れる。太宰は謝罪のための訪問を申し出ていたが、急遽その撤回を伝えてきた書簡で、文壇への未練を断ち切ることや、叱責に耐えられる精神状態ではない旨が書かれている。のちに「人間失格」の題材となる時期の混乱した内面を伝える重要書簡で、2022 年 10 月 4 日の『読売新聞』ほか新聞報道で取り上げられ、大きな話題となった（2022 年度）。

いずれも佐藤春夫が文壇人脈の中枢にあったことを示すものである。その他の文学者との交流についても書簡の調査が進んでおり、公開時期に関して関係者との調整を続けている。

(5)文学修行時代の新資料公開

1907 年の佐藤春夫日記、および 1913 年から 15 年にいたる佐藤夏樹・秋雄（春夫弟）の日記をカラー影印版としてまとめ、翻刻の一部に解題を添えて公開した。また同時期の資料として、春夫の父豊太郎が春夫ほか家族に宛てた 1913 年から 17 年にいたる書簡の翻刻と解題を公表した（2022 年度）。1918 年に「田園の憂鬱」でデビューする以前の春夫の生活については、本人の回想のほか依拠すべき資料に乏しく、これまで不明な点が多かった。これらの資料は伝記研究の穴を埋める重要な意味を持つ。生田長江・森田草平のもとで人脈を広げていった様子や、結婚問題、上京生活の経済状況などが具体的に判明した（2021 年度）。

また、1912 年 10 月 22 日付の春夫の父宛の書簡に、「同時代私議」と題する文章の草稿が同封されており、その内容も解析して公表した。明治天皇大喪当日に殉死した乃木将軍の最期に感激した旨が書かれているが、その感激の背景をなすものはニーチェやトルストイに触発された近代個人主義への讃美であり、忠義を讃える当時の輿論とは異なる着眼点であったことが重い意味を持つ。最終的にこの作品は詩形式で発表され、輿論への違和感を強調する方向で推敲が施された過程が分かる。日本社会の封建制に詩で異議を申し立てていた時期の春夫の草稿は、ほかには現存が確認できておらず、生涯社会批評を志した春夫の文学的原点を知る上で重要な資料と言える。この発見は 2022 年 7 月 30 日の NHK ニュースで報道された（2022 年度）。

(6)台湾・福建紀行に関する注釈研究の進展

佐藤家資料には、1920 年の台湾・福建旅行直後に春夫が書いた作品の草稿が残されていた。『南方紀行』の草稿では、厦門における排日感情をどのように作品に取り込むかで苦心した痕跡が確認できた。また、1922 年に『南方紀行』として出版された福建旅行記、1936 年に『霧社』として出版された台湾旅行記は、もともと旅行直後には 1 冊の本にまとめて出版する計画だっ

たことを示す目次も残されていた。その他、「蝗の大旅行」の冒頭部分の草稿や、「星」の典拠となった民間演劇の歌詞本（歌仔冊）、アドバイザーであった台湾原住民研究者・森丑之助から贈られたとみられる「蜻蛉玉」（台湾原住民の装飾品）などの実物資料も確認でき、台湾文学館での展示品として提供した（2019 年度）。

論文としては、春夫の「台湾もの」の一つ「鷹爪花」のモデルと虚構化の手法に関するもの、春夫の台湾観に「故郷の喪失」のテーマを指摘したもの（2020 年度）、『南方紀行』の旅で参観した集美学校に関する調査と、作中作「青い薔薇」の典拠に関する新発見を論じたもの（2021 年）があり、これまでの注釈研究を総合して書籍の出版を計画している。

(7)翻訳・海外発信

今回の研究期間後半は新型コロナウイルスの蔓延によって海外渡航ができず、フィールドワークに支障を生じたが、台湾中央研究院のオンラインシンポジウムと、日中国際研究チームのオンラインシンポジウムに参加して発表を行い、意見交換をすることができた（2021 年度）。また、厦門大学との共同研究として本研究成果の論文の中国語訳出版を進めたほか（2021 年度）、南京理工大学ではビデオ講座を行うなど、限られた条件の下ではあったが、研究交流・海外発信には、全体として大きな成果を挙げることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 河野 龍也	４．巻 18
２．論文標題 翻刻　佐藤春夫家族書簡（一九一三～一九一七年）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京大学国文学論集	６．最初と最後の頁 109～128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002007319	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙橋 百百子，竹田 長男，竹田 有多子，河野 龍也	４．巻 103
２．論文標題 国文学科公開講座「美の冒険者・佐藤春夫の挑戦」 座談会 孫が見た春夫の思い出	５．発行年 2022年
３．雑誌名 実践国文学	６．最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河野龍也	４．巻 36
２．論文標題 文学研究とフィールドワーク：佐藤春夫の台湾紀行	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要	６．最初と最後の頁 27～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河野龍也	４．巻 85
２．論文標題 佐藤春夫展の台湾開催に関わって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 昭和文学研究	６．最初と最後の頁 191～193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河野 龍也	4．巻 41
2．論文標題 佐藤春夫関係日記翻刻（一）―明治三十七年春夫日記・大正元年秋雄日記―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 年報 = Nenpo	6．最初と最後の頁 129～194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002293	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野龍也	4．巻 15
2．論文標題 春夫文学の揺籃期にせまる―佐藤春夫・夏樹・秋雄日記の価値	5．発行年 2022年
3．雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所 別冊年報	6．最初と最後の頁 451～462
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河野 龍也	4．巻 100
2．論文標題 佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（五）― 「集美学校」の青いバラ ―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 實踐國文學 = Journal of Jissen Japanese Language and Literature	6．最初と最後の頁 78～96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002307	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野龍也	4．巻 13
2．論文標題 《南方紀行》歴史与故事之間（『南方紀行』論：歴史と物語のあいだ）梁曦・呉光輝訳	5．発行年 2021年
3．雑誌名 鼓浪嶼研究	6．最初と最後の頁 152～176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 河野龍也	4．巻 98号
2．論文標題 「鷹爪花」は青く花咲く―佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 実践国文学	6．最初と最後の頁 66-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002196	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野龍也	4．巻 8巻2号
2．論文標題 《南方紀行》：佐藤春夫的厦門印象与身分認同（『南方紀行』：佐藤春夫の厦門の印象とアイデンティティー）熊娟訳	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東北亜外語研究	6．最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河野龍也	4．巻 6
2．論文標題 佐藤春夫と白話小説―『玉簪花』の試行	5．発行年 2020年
3．雑誌名 講座近代日本と漢学（山口直孝編『漢学と近代文学』）戎光洋出版	6．最初と最後の頁 191-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河野龍也	4．巻 第94号
2．論文標題 佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実（三） ― 新資料にもとづく旅行日程の復元 ―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 実践国文学	6．最初と最後の頁 94-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野龍也；王浄華・呉光輝訳	4．巻 第9輯
2．論文標題 佐藤春夫《南方紀行》的里巷世界	5．発行年 2019年
3．雑誌名 鼓浪嶼研究	6．最初と最後の頁 191-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 河野龍也
2．発表標題 春夫文学の今後
3．学会等名 佐藤春夫生誕130年記念事業「「わんぱく時代」の地から」（新宮市丹鶴ホール）（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 河野龍也
2．発表標題 美の冒険者・佐藤春夫の挑戦
3．学会等名 実践女子大学公開講座「美の冒険者・佐藤春夫の挑戦」（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 河野龍也
2．発表標題 台湾官民の厦門視察と『南方紀行』の位置　：佐藤春夫の油絵の謎
3．学会等名 国際共同研究シンポジウム「近代日本の中国都市体験(1)：内山書店・香港・厦門・基本資料」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 河野龍也
２．発表標題 作為權力的語言：佐藤春夫眼中的殖民地臺灣（権力としての言葉：佐藤春夫が描いた植民地台湾）
３．学会等名 帝國、民國與黨國：文本、思想與意識形態的纏鬥（中央研究院）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河野龍也
２．発表標題 文豪・佐藤春夫と太宰―船橋時代に出会った師弟―
３．学会等名 「文豪・佐藤春夫と太宰」展講座（船橋市西図書館）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河野龍也
２．発表標題 船橋時代の太宰治
３．学会等名 「太宰治と船橋」展講座（船橋市西図書館）（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

１．著者名 河野龍也	４．発行年 2022年
２．出版社 武蔵野書院	５．総ページ数 228
３．書名 生誕130年記念知られざる佐藤春夫の軌跡―秘蔵資料をよむ―実践女子大学・新宮市立佐藤春夫記念館包括連携協定締結記念	

1．著者名 佐藤 春夫（河野龍也解説）	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 214
3．書名 田園の憂鬱	

1．著者名 佐藤 春夫（河野龍也編）	4．発行年 2021年
2．出版社 中央公論新社	5．総ページ数 352
3．書名 佐藤春夫中国見聞録　星／南方紀行	

1．著者名 佐藤 春夫（河野龍也編）	4．発行年 2020年
2．出版社 中央公論新社	5．総ページ数 320
3．書名 佐藤春夫台湾小説集　女誡扇綺譚	

1．著者名 河野龍也・張文薫・陳允元編	4．発行年 2020年
2．出版社 衛城出版	5．総ページ数 241
3．書名 文豪曾經來過：佐藤春夫與百年前的臺灣	

１．著者名 河野龍也	４．発行年 2019年
２．出版社 鼎書房	５．総ページ数 432
３．書名 佐藤春夫と大正日本の感性―「物語」を超えて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

台湾文学館ウェブ展示「百年の旅びと－佐藤春夫１９２０台湾旅行文学展」（日本語版）
https://www.tlvm.com.tw/Theme/ExhibitionCont1?LLid=25
臺灣文學館虛擬博物館「百年之遇―佐藤春夫1920臺灣旅行文學展」（中文版）
https://www.tlvm.com.tw/Theme/ExhibitionCont1?LLid=18

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	厦門大学	南京理工大学		
その他の国・地域（台湾）	台湾文学館	台湾大学	中央研究院（台湾）	